

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

## \* 素晴らしき自転車レース⑥ \*

谷口 和久

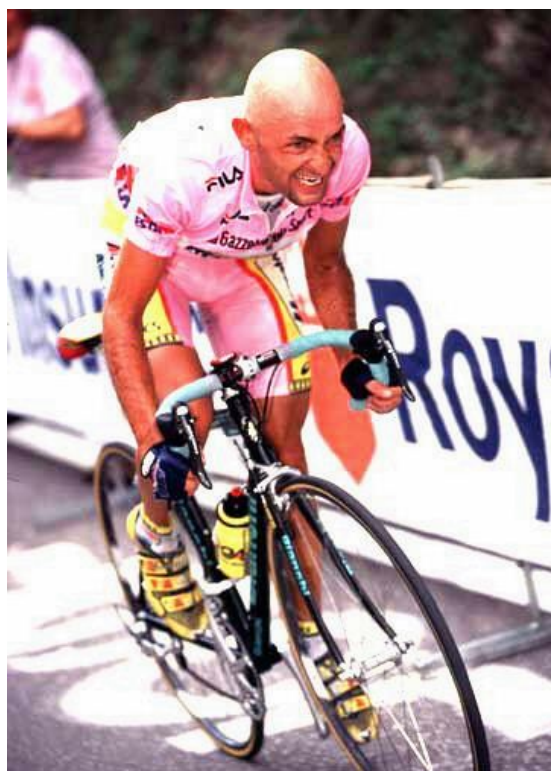
### ● Memoria di Marco Pantani

毎年2月14日は、三世紀の聖人、ウァレンティヌスの殉教記念日であるが、ここ日本では結婚式やクリスマスと同様、クリスチャンでもなんでもない人でも参加できる(というか、勝手に参加している)キリスト教関連イベントとして、生活に溶け込んでいる。

そもそもは、時のローマ皇帝クラウディウス二世が、ガリアやゲルマニアに攻め込むにあたり、兵士たちが国に残した奥さんに後ろ髪ひかれるのを防ぐという名目で結婚を禁止していたにもかかわらず、聖ウァレンティヌスはその禁を破り、兵士たちのために結婚式を執り行って皇帝の逆鱗に触れ、処刑の憂き目にあった、その処刑日が2月14日であったという言い伝えである。

そこから、恋愛の守護聖人として奉られ、時を越え海を渡って、ここ日本ではチョコレートを媒介として女性が男性に愛を告白する日となり、むしろ最近では「目的と手段は入れ替わる」という格言のとおり、チョコが飛び交うことに意義のある日となっている。日本人の宗教観うんぬんはこの際置いて、まあ、どちらかといえば“お目出度い”部類のイベントと言えるだろう。

そんな2月14日ではあるけれど、われわれ自転車レースファンにとっては、ひとりの偉大なレーサーの命日として、胸に刻まれている。そのレーサーとは、イタリア・チェゼナーティコ出身のヒルクライマー(登りを得意とする選手)、マルコ・パンターニ “Marco Pantani”である。



【マルコ・パンターニ “Marco Pantani”】

### ●一自転車少年からトッププロへ

パンターニは1970年1月生まれ。まったくの蛇足だが、筆者とは同学年にあたる。彼が亡くなったのは2004年。享年わずか34歳。同い年の、しかもジロ・ディ・イタリアやツール・ド・フランスの頂点を極めた男がこれほど若くして孤独で悲惨な死を遂げたことに、私自身衝撃を受けたし、またイタリアのみならず世界中の自転車ファンの間

大きな波紋を呼んだショッキングな出来事であった。その最期についてはあとで触れるとして、彼がなぜここまで慕われる選手となったのか、そのキャリアをたどっていききたい。

パンターニが生まれたチェゼナーティコはエミリア・ロマーニャ州の海沿いの町。サッカーの長友選手が所属するチェゼーナとは目と鼻の先である。パンターニも、イタリアの少年のご多分に漏れず、子供の頃はサッカーに熱中していたが、今ひとつ芽が出ず。とある日、家の近所を走り回る自転車を見かけたのが、自転車を始めたきっかけであった。

自転車にはまったパンターニは、偉大なレーサー“Campionissimo”ことファウスト・コッピの名を冠した、その名も「ファウスト・コッピ自転車クラブ」に所属し、早いうちからメキメキ頭角を現していった。海に生まれた少年は山に憧れ、幼いころから100キロもの距離をものともせず、内陸の山間部まで足をのばして走りまわり、登りでの才能を伸ばしていったのである。

### ●レースの主役“scalatore”

登りを得意とする選手は、イタリア語で“scalatore”と呼ばれる。もともと“scala”という単語は「階段」や「はしご」を意味し、そこから「登る人」ひいては「登山家」や「(自転車の)ヒルクライマー」をあらわすようになった。

登りというのは、だれでもそうだろうが、まあ、しんどい。当たり前だけど。ママチャリでもみなさん経験があるだろうが、足は重い、そこを無理やり進もうとするから腕や上半身によけいな力が入るまで、ギッコンバツタンと、体重差のある人間同士がシーソーに乗った時のような、ぎこちない動きにどうしてもなってしまうものだ。プロの選手であっても、100キロ、200キロを全力で走ってきて最後の登りにかかるころには疲労困憊となり、素人ほどではないにせよ、ギッコンバツタンはまぬがれない。しかしながらパンターニの登りは、上半身はがっちり安定し、足の動き(ペダリング)は綺麗な真円を描く。あまりに滑らかな真円ペダリングぶりは、夜中にレースのビデオなぞ見ると、知らず知らずのうちに睡眠誘導されてしまうほどである。

それにしても、自転車競技ほど、体の動きの限定されているスポーツも少ないのではないだろうか。もちろん、リュージュやボブスレーのように、一般人が触れる機会のない特殊なものは別として。はたから見ると脚には、動いているのは脚だけ、それも半径およそ17センチ(＝クランク長)の範囲内。ハンドルを握る位置はいろいろ選択できるので、持ち替える時には多少体は動くが、それは直接的には自転車を前に進めるための動きではない。サッカーや野球、あるいは同じ持久系競技である陸上などと比べると、圧倒的に身体の動きが少ないスポーツである。

かように身体動作は少ないながら、自転車競技は「世界で最も美しいスポーツ」と言われている。まあ、言っている大半は自転車関係者なわけだけど。それにしても、ヨーロッパの古い街並みや雄大なアルプス、ピレネー、それにドロミテといった山並みの中を、色とりどりのバイクとウェアが流れるように駆け抜けるさまは、本当に心から美しいと思う。そして、スピードも美しさの一要素となっていることは間違いない。



【ラルプ・デュエズに行くパンターニ】

私自身は残念ながら生前のパンターニの走りを生で見る機会にはなかったが、私の元同僚で98年のツールを観戦し、パンターニの登りをじかに見たという人から話を聞いたことがある。かなりの勾配の上り坂であっても「飛ぶように」、あつと言う間に走り抜けていってしまって、ほとんど顔など見えなかったそうである。(ちなみにパンターニは頭がスキンヘッドなので、顔がちやんと見えなくてもすぐ認識できたとのこと)。ビデオなどで見る

と、登りであっても巡航速度がそもそも速いうえに、一瞬のダッシュの切れ味が格段にすばらしいので、他の選手が止まって見えるほどである。ラルプ・デュエズという、標高差1100メートルを超えるフレンチ・アルプスの強烈な登り坂を、平均時速約25キロで走った記録を持っており、この記録はいまだに破られていない。ちなみに、ラルプ・デュエズの登り口に入るまでに、すでに200キロ近くを、それも2000メートル級のアルプスの峠をいくつも越えてきて、この速さである。筆者にとっては、平地であっても平均時速25キロで走るのには至難の業であり、この記録がいかに素晴らしいかがおわかりいただけるだろうか(比較対象が貧弱すぎるが、この際そのことは置いておいて)。

### ●栄光から闇へ、そして・・・

92年にプロデビューを果たしたパンターニは、デビュー3年目の94年にジロで総合2位、同年のツールでも総合3位に入った。特にジロでは、最後の山岳コースで、一発逆転を狙った大逃げをかまし、残念ながら最終的にはライバルチームにつぶされてしまったものの、そのチャレンジャブルな走りはかつてのコッピを彷彿とさせ、イタリアに熱狂の渦をもたらしたのである。

しかしながら、翌95年はレース中にコースに飛び込んできた車のため足の骨を折り、選手生命も一時は危惧されるほどの重傷を負った。続く96年シーズンもまるまる棒に振り、復活をかけた97年も、5月のジロでコースに飛び込んできた猫が引き起こした集団落車に巻き込まれリタイア。しかし、この年は夏には復帰し、7月のツールでは前述のラルプ・デュエズでのコースレコード達成を始めとして、2年あまりの空白を埋めるかのように大いに気炎を吐いたのである。

そして98年。この年はパンターニにとって輝ける年となった。5月のジロでは、ロシアの強豪パヴェル・トンコフと山岳において、のちにパンターニ自身「勝利か、さもなくば死か “Trionfare o morire”」と語るほどの死闘を繰り広げ、最終的に優勝者に与えられるピンクのジャージ “Maglia Rosa”を手中にしたのである。7月のツールでは、ジロの疲労が残る中、当初ははかばかしい走りではできなかったが、山岳地帯に入るとぐんぐん調子を上げ、氷雨の降るフレンチ・アルプスでライバ

ルのドイツのサイボーグ、ヤン・ウルリッヒを粉砕した。ラストの坂を渾身の力で駆けあがるさまを見て、イタリアのTVアナウンサーは「パンターニが飛んでいます！」と絶叫を繰り返した。このレースを振り返って、パンターニはこのように語っている。「(このアタックは)非常にリスクではあったけど、苦痛のことなど気にしなかったよ。(けがによるブランク期間の)ここ数年で、苦痛と共に生きることを学んだのさ。なぜ、これほど強烈に坂を駆けあがるのかって？それは苦しむ時間を少しでも短くするためさ “Ho rischiato molto e non ho pensato alla sofferenza che mi aspettava. Con tutto quello che mi è capitato in questi anni, ho imparato a convivere con la sofferenza. Perché vado così forte in montagna? Per abbreviare l'agonia”。」

同じ年に、ジロとツールを制したのは過去にわずか7人。イタリア人としては、ファウスト・コッピとパンターニの、2人だけである。

しかし栄光の日々は長くは続かなかった。いや、栄光の輝きがまばゆいほど、続く暗黒のどす黒さが際立ったと言ってもよい。99年、ふたたびジロの総合優勝を目前に控えた日、ドーピング検査にひっかかったパンターニは、その後、全盛期の走りを取り戻すことは二度となく、失意のうちにクスリに溺れ、最後はリミニのホテルで薬物中毒による発作により、孤独のうちに34年の短い生涯を閉じた。苦悩の日々を少しでも短くするかのよう

### [参考資料]

Davide Cassani e altri, *Vai, Pantani*, Mondadori, 2006

ベッペ・コンティ 『マルコ・パンターニ 海賊の生と死』、未知谷、2009

砂田弓弦 『ジロ』、未知谷、2002

砂田弓弦 『ジロ・デ・イタリア 薔薇色の輪舞』、八重洲出版、2010

(当館スタッフ)

## RiITALIA -イタリア再発見-

### 第1回『イタリア語再発見』

国司 航佑

1998年、高校生の時分に、筆者はオーストリアとの国境付近に位置するトレントという町で一年間の留学生活を送った。それから12年が経ち、現在はナポリに暮らしている。トレントは北部イタリアの田舎町であり、冬には雪が積もる。ナポリは南部イタリアを代表する大都市であり、温暖な気候で知られている。ある新聞の記事によると、イタリアでもっとも住みやすい町はトレントであり、もっとも住みにくい町はナポリらしい。この二つの町は、つまるところあらゆる点において対照的な町である。

ナポリに住み始めて三カ月が経ち、私はあることに気付いた。それは、私が以前イタリアに関して抱いていたイメージが非常に偏ったものだったということである。イタリアとは何か、などと問うのはくだらないことだとは分かっている。それでも「イタリア」のイメージは、無意識に私の頭の中に形成されていたようだ。トレントでの一年間で下書きを終え、それから10年間と少し日本でイタリア文化を学びながら、ゆっくりと下絵に色を入れて、完成させていったのだろう。しかし、こうして形成されたイメージは、ナポリによって見事に打ち消された。これは、私の考えていた「イタリア」と違う！ 違う。違う。なにもかもが違う。

例えば、言葉が違う。北部で話されているイタリア語と南部で話されているイタリア語が非常に異なっているというのは、日本でもイタリア語(文化)学習者の間ではよく知られていることであろう。しかし、他人からもたらされる情報と、自らの手(耳?)で触れる体験との間には、概して大きな隔たりがあるものである。かくいう私も、以前までは他人からもたらされる情報を通してこの差異を想像し、また検討していた。「南北の差異」についてよく語られるが、一体どこまでが真実なのだろうか。私には南部出身の友人もいるが彼らは「イタ

リア語」を話すじゃないか。実際は八割方が誇張なのだろう、等々。この「南北の差異」に関して、私は半信半疑だったのである。

こうした私の疑惑が打ち砕かれたのは、2010年の夏、ナポリ・カポディキーノ空港を降りた直後であった。夜も更けていたので、予約してあったホテルに直行した。ホテルに着くと、受付の男に予約した者であることを告げる。男は、事務手続きを済ますと、私に尋ねた。「チェッサート?」。私の頭脳は素早く回転する。<“cessare”の過去分詞“cessato”のことかな? 同じことを言うなら“smettere”を使う方が口語的だけれども、南部では古い言葉使いをするって聞いているからあり得るな、ちょっと待てよ、いずれにしても、文脈からして“cessato”では意味をなさないじゃないか>(所要時間0.5秒) 結局、私は聞きなおすことにした“Scusi?”。男は、英語(ナポリなまり)に訳してこう言った“Is this the first time...?”。

もうお分かりだろうか。男は「今までにこのホテルに来たことがあるのか」と訊いていたのである。私の耳に“Cessato?”と聞こえた質問は、標準語風に言いかえるならば、“C'è già stato?”だったのだ(それとも“Ci sei stato?”だったのかも)。正確なところは今となっては知る由もない)。この時、ナポリ人の話す言葉が自分の耳に馴染まないものであることを、私は知った。が、それだけではない。ホテルマンという観光業に携わる者が、非常に強いアクセントを伴ったイタリア語を話していたのである。町なかでいまだ方言が息づいているだろうことを推測するのに、これは十分すぎる体験であった。



【庶民的なピザ屋。中ではナポリ方言が行き交う】



ナポリ方言のおもしろさは、言語自体の特質がいわゆる標準語のそれとかけ離れているということだけではない。方言とその背後にある社会構造との関係が、また興味深いのである。バールや八百屋、もしくはタバッキ(直訳は「タバコ屋」だが、タバコ以外にも、公共交通機関の乗車券、切手等が置いてある。ただし、つまるところ何が売られているのか、と問われれば答えに窮する。店の在庫や、店員の気分といった不安定な要素に大きく左右されているようでもある)といった地域とのつながりが深い店では、十中八九、方言色の非常に強いイタリア語(?)を耳にすることになる。最終母音が省略されたり子音が微妙に変化したりして発される彼らの「イタリア語」には、もはや原型の痕跡がないかのように(少なくとも私には)聞こえる。こうした現象の典型的な例を挙げるなら、“aspetta!”を「アシュペツ」と発音することだろう。最終母音を省略するどころか、その前の子音まで省略され、sはアインシュタイン(Einstein)のsのような発音に変化して、さらにはアクセントまでが移動している。この調子の変化が会話の隅々にまで及んだらどうなるのか、これは読者諸氏の想像に任せたい。

スーパーや公共施設などに行けば、アクセントは少し控え目になり、人々の話す言葉は私の耳にも少し優しいものになる。ただし、その文法や言い回しなどには、方言色が強く残っている。例えば、敬語的表現をするときに、たまに Lei の代わりに Voi が使われることがある。“signore”という堅苦しい表現を嫌ってか、若くもない人間を“giovannotto”と呼んだりする。遠過去が多用されている会話に出くわすことも、まったく珍しいことではない。いずれも、北ではめったにお目(耳)にかかれぬ光景であり、そしてまさにそのためであろうか、これらの表現は外国人用のイタリア語の教科書には載っていない。

一方で、標準語を話す人々も実は存在している。大学生、大学院生、研究者(の卵)、芸術家などである。彼らのほとんどは、中産階級の実家に生ま

れ、家庭内ではナポリ方言ではなく標準語を喋るように教育されているという。彼らはまさしく教科書通りのイタリア語を話すので、こちらも、私が習ったイタリア語と違う! ?などと戸惑うことはない。ちなみに、冒頭で触れた、私が日本で知り合った南部イタリア人たちは、この種の人間の、中でも知的レベルの高い人たちだったのだろう。彼らの言語に南部の色を感じなかったのは、そういうわけである。そして、あの頃の私は、彼らとの体験をサンプルにしてナポリを含む南部イタリアの一般的状況を想像していたのだ。つまり、間違いを犯していたのである。



【芸術家一家。家族内でもナポリ方言を喋ることはない】

さてさて、トレンツの言語の方はどうなのだろうか。ナポリの人々の話す言語が標準語ではないと判断したとき、私は、トレンツで話されていた「イタリア語」にはなまりはないと固く信じていた。トレンツの高校に通っていたころ、修学旅行でフィレンツェに行って、クラスメイトが“così così”を「コスィコスイ」と発音するフィレンツェ人の喋り方を真似して遊んでいたのをよく覚えている(実は、「ホスイホスイ」とした方がよりフィレンツェ風なのだが、このことに私が気付いたのは最近のことである)。その時、我々は標準語を話す、やつらはなまっているなあ、と感じたものである。こうした印象は、留学を終えてトレンツを離れ、それからトレンツ出身でないイタリア人の知人友人を多く作って、そ

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743.212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

ののちに何度かトレントを再訪して、それでも拭い去られることはなかった。ひょっとしたら、トレント人の喋るイタリア語にもアクセントは多少あるのかもしれない。が、少なくとも私の耳には、彼らの言葉と標準語の間に、なんらかの差異があるとは思えない、等々。

先日、ナポリに来て二カ月がたち、図らずもトレントを訪ねることとなった。お世話になったホストファミリー、変わらぬ友人に再会する。聞きなれた声、聞きなれた口調なのに何かが変わる。彼らの言葉は、なまっているのだ。それも、非常に、と形容できるほどに。

私が「イタリア語」だと思っていたものは、「トレント風イタリア語」だったのである。もちろん、「トレント風」であれ、「ナポリ風」であれ、「フィレンツェ風」であれ、イタリア語であることには変わりはない。だから、昔私が抱いていたイタリア語のイメージも間違っていたわけではない。ただしそれは、偏った平面的なイメージであった。本当のイタリア語は、複数の方言を底辺に据えながら、その上にぼんやりとした頂点をもつ（標準語が現実存在しているのかは不明だが、イタリア人の頭の中ではそれが想定されていることが多い）、立体的な言語である。二つの基準点を手に入れた今、私

の「イタリア語」は少し立体的になりつつある…のかもしれない。



【十年來の友人の話す言葉が、なまって聞こえる】

(元会館スタッフ)

## … 会館 だ よ り …

### イタリア語検定 直前講習会

3月6日(日)に行われる実用イタリア語検定の本番に向けて、よく出題される文法事項やひっかけやすいポイントを指導します。

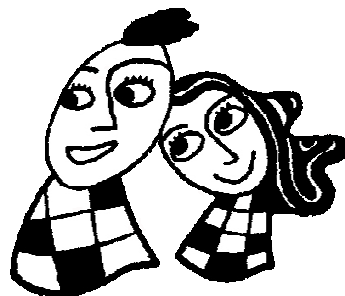
・日時: 2月20日(日)

- ①5級向け: 10:30~12:00
- ②4級向け: 13:00~14:30
- ③3級向け: 15:00~16:30
- ④3級作文模試: 16:30~17:00

・費用: 2科目 一般・受講生 3,000円  
維持会員 1,500円  
1科目 一般・受講生 2,000円  
維持会員 1,000円

※3級作文模試は別途1,000円で、  
3級向け対策受講者のみオプションとして受講可

・会場: 日本イタリア京都会館 本校  
同 大阪梅田校  
※大阪は4, 5級のみ開催



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: <http://italiakaikan.jp/>